

第2回真庭市生涯学習基本計画策定検討委員会（基調講演）

日時：令和3年9月30日（火）午後7時～7時30分

場所：真庭市役所本庁舎3階 会議室

基調講演：平田オリザ氏（劇作家・演出家） ※リモート参加

内容：若者が戻ってくるまちづくりのために必要な「生涯学習の役割」
豊岡市での取り組みについて

今どこの市町村でも人口減少の問題が、最大の課題になっているわけです。霞ヶ関で考えているのは、上の部分でライフワークバランスですね。一番象徴的なのは、待機児童の解消。もちろん非常に深刻な問題なんですけれども、実際には待機児童の問題を抱えている自治体は、約200ぐらいです。本当に深刻なのは100ぐらいですね。残りの自治体は、子どもが欲しくて欲しくてたまらない自治体です。

例えば、真庭市とか私が住んでいる豊岡市の課題は何かというと、非婚化・晩婚化の方だと思います。なぜならですね。結婚した世帯の出産率は余り変わっていないか、今も、多くの自治体では上がってきているんですよ。もちろんですが、念のため申し上げますが、恋愛も結婚も出産も子育ても、すべて個人の自由です。逆にいうと内面の問題ですので、行政が介入できる部分が非常に少ないんですが、そうはいつてもこれほど少子化が進んでしまうと、急速に進んでしまうと社会が壊れてしまう。このカーブをどうにかして、行政も何か施策を使ってですね、緩やかにしないといけないというのが、今の現状だと思います。統計からだけでいうと、個人の内面は別にして、結婚してさえくれば子どもはできるんです。あるいはフランスのように結婚しなくても安心して子どもを産んで育てられるような社会にするかということになるんですけれども、後者がちょっと日本では時間がかかります。統計上は、結婚してくれさえすれば子どもはできます。

残念ながら、実は子育て支援というのは、少子化には貢献しないというデータが出ている訳ですね。ちょっと冷静に考えていただくと解ると思うんですけれど、100万円賞金が出るから子どもを産もうって考える親はいないんですよ。現実には。若者たちはそれで産むわけじゃないんです。もちろん例外もあります。例えば岡山県でいうと奈義町です。ここも私深くお手伝いをさせていただいています。特殊出生率2.81%という日本一の町になりました。これはご承知のように、隣の津山市から多くの人々が移住をしてきたわけですね。これは、子育てが、支援策がいろいろあったり、教育政策がしっかりしているんで、移住をしてきたということで、今、人口1万人以下の小さな自治体で、こうやって成功しているところはあります。

思い切って税金をつぎ込みやすいので、周辺の大きな自治体。例えば、北海道では旭川市というのがありますが、その隣の東川町というのがあるんですが、東川町も人口が増えているんです。そういう風にして人口が増えている自治体というのがあるんですけれども。

これは都市部から人をとってきているだけなんで抜本的な解決策にはなっていないけれど、問題はですね。地域の課題はこの非婚化・晩婚化です。特に若い女性たちは出会いの場が少ないと口を揃えて言います。それから豊岡も真庭もそうですけれど、高校の数が少ないですから、そこで偏差値で輪切りになってしまって、人生が決まっているように見えてしまう。コミュニケーション不足ですね。特に男性ですね。日本の男性の4人に1人は、結婚しない、できないと言われているわけですよ。この大きな原因がコミュニケーション不足ということがいわれている。

もう一つはですね。私は大学の教員をやって20年以上経つんですけど、自分のゼミの学生で、自分のふるさとは、仕事がないから帰らないとか、学生に会ったことがないんですね。現実には。ずっと雇用雇用と言ってきたわけですけども、もちろん雇用は大事なんですけれども、今地方の方が、雇用がありますよね。若者の人口が急速に減ってしまったために、人手不足になっているわけです。どの自治体でも。でも帰ってこない。学生たちは口を揃えて、ふるさとは・田舎はつまらない。というふうに言います。東京や大阪でこんな刺激的な毎日を送ってしまったら、もう帰れないと言います。

僕はよく、面白い街をつくったらいいじゃないですか。と前言ってきました。あるいは、出会いのある街をつくる。もう一つ大事なものは、今日のテーマである「戻って来なくなる街をつくる」。実はですね、関連的なことではなくて、これからの街づくりを考えるうえで非常に大事なポイントになるんじゃないかと考えています。

これまでの日本の地域振興政策、今でいう地方創生の政策というのは、高卒男子を囲い込む政策でした。ようするに、出稼ぎ・集団就職をなくしていく政策です。これは、見事に成功したわけです。昭和の30年代から40年代にかけて、地方に企業を誘致し、公共事業を誘致していくことで、雇用の場をつくって、出稼ぎ集団就職がなくなっていった。これは非常に成功した政策だったわけですけども、この政策があまりにも成功したために、平成の30年間もその成功体験にすがってしまって、地方自治体の政策が、振興していかなかったことに大きな問題があるんじゃないかと考えています。で、その間何が起こったかということ、要するに高等教育の進学率が急上昇。真庭市もそうだと思うんですが、豊岡市も18歳以上の人口の7割がいったん外に出ます。

豊岡の田島には、これまで4年制の大学が一つも無かったんで、7割が外に出ます。さらに最も、見誤っていたのが1990年代以降、女性の4年制大学への進学率が急上昇したということです。要するに、高卒男子の働く場とところをつくれれば、女性は元々大学にはいかないんで、せいぜい短大を出て、地元の企業や信用金庫なんか勤めて、3・4年で寿退社して、結婚して子どもを産んでくれると。まさに男性目線の政策がずっと残ってしまった。男の雇用の場をつくれれば、女性はそのまま残ってくれるんだろうと。まさに男性目線の政策ですね。

戻って来なくなる街というのは、残ってくれる街と大きく違うわけです。なぜなら、真庭で言えばですね、近いところと言えば岡山市あるいは神戸・大阪・東京。そういった街での楽しい刺激的な生活を最低でも4年間過ごした22歳の男女に、それでも真庭に戻っ

てきてくれますかという問いかけをしないといけなくなる。それは残ってもらう政策とは全然違う政策ですよ。この視点が、これまでのその地方自治体のUターン政策には欠けていたのではないか。もちろん東京や大阪のような刺激のある街をつくれということではありません。地方には地方の魅力があります。だとしても、若い男女が、戻って来たいようになるように、豊かな自然というだけでは、やっぱり戻ってこないわけです。そこのところの視点が重要ではないか。今ですね。

コロナ以前で、東京に暮らす子育て世帯4割が、地方移住を考えたことがあるというアンケート調査がある。おそらく今は、7割8割になっているのではないかと思います。でも帰ってこないですよ。でも移住してこない。じゃあ、私たちはその来る理由じゃなくて、帰ってこない理由の方を考えるべきだったと思うんです。

どの自治体も立派なパンフレットをつくって、Uターン・Iターン・Jターンを呼び込もうとしています。どのパンフレットにも、豊かな自然と子育てしませんかと書いてあります。でも豊かな自然、日本中にありますよね。どこを選んでいいかわからない、しかも帰ってこない。私たちは、帰ってこない方の理由を考えるべきだったと思うんです。もちろん雇用は大事です。自分に合った仕事がないと若者達は考えている。多様な雇用を生むことは大事なんですけど、他にもいくつか要因があります。一つは教育。そして医療と文化です。まあ医療についてはですね。結構相当無医村とか無くなっていますし、ドクターヘリですとかいろんなことを使って救急医療もうけられるようになってきた。残りは教育と文化なんですね。

まず、東京と同じだけの教育水準があるかどうかということです。それから文化ですね。これはスポーツとか食文化も含まれます。ここからが今日の生涯学習の話と結びつくわけですから。

私も仕事柄、Iターン・Uターンのいろんな地方自治体さんの職員研修なんかに呼ばれるんですよ。どこを見ますか、どこに、Uターン者・Jターン者が下見に来るとき、どこを見ると思いますか。と聞きます。もちろん仕事先、雇用を見ますね。それから子育て中なら保育園とか小学校を見学しますよね。それから買い物がちゃんとできるかどうか。大体そんなものを見ます。そこまでは行政の方はみな同じです。次に見に来るのがですね。子育て世代が見に来るのは、図書館ですね。図書館は若いお父さんお母さんにとって、非常に重要な場所になる。本がちゃんとそろっているかどうか。良質の絵本があるかどうか。しかも図書館は、その都市の、自治体の文化の顔なので、それを見れば、その自治体がどのくらい文化に力を入れているかわかる。真庭市はですね。幸いにして素晴らしい図書館をお作りになりましたね。ああいうものを、もっともっとIターン・Jターン政策としても活かしていくということが、これから重要になっていくんじゃないかと。

それから意外に見るのが、例えば、スポーツですね。スイミングスクールがあるかどうかを見るわけですね。スイミングはですね、今は、ピアノや英会話以上に習い事のナンバーワンなわけですよ。そうするとスイミングスクールがあるかどうか。ちゃんと聞きに来ます。今までの行政は、そんなことを考えていなかったんですよ。スイミングスクール

なんかは民間がやるもんですから。しかし、そういうものがない自治体だったら、そういうものを用意しないと、なかなか都会で暮らしてきた若い夫婦は、子育て世代は戻ってき
てくれない。

あるいは食ですね。保育園に子どもを預けた後に、ママ友・パパ友が気兼ねなくいける
おしゃれなカフェがあるかどうかですね。できればいいスイーツがあるかどうかです。も
っとできれば、イタリアンレストランとか。そういうものがあるかどうかですね。

例えばこれも奈義町の例ですけれども、ご存じの方も多いかと思いますが、現代美術
館のすぐ横にですね、町がイタリアンのレストランを、釜付ピザのイタリアンのレストラ
ンを誘致しました。2時間長蛇の列ですよ。要するに津山からも食べに来る。ああいう
ものが実はですね、これからは、広い意味での、ある意味食もですね、生涯学習の非常に
重要なパートナーになってくるということなんですよ。

今日は、ちょっと豊岡の話もするようにと言われているので、少し紹介したいと思いま
す。お隣の兵庫県の県北の但馬地方。その中に豊岡市があります。但馬で東京都と同じ面
積がありますが、人口は16万人。そして豊岡が、東京都23区と同じ面積で、人口8万人。
まあ、ほんとに真庭とすごく似ております。海がある事だけです。豊岡と真庭の違い
はですね。豊岡も1市5町が合併した、兵庫県で最も大きな市です。で観光資源もいろ
いろあるということも真庭と非常に似た立地条件ではないかと、何度か寄せていただいた
ので感じております。

例えば古い町並みがあるところなんか、まあ似ているわけですね。この度の再生で、ま
あ有名になりました。このコウノトリというのは、田んぼにフナとかドジョウがいないと、
完全肉食なので育たないので、無農薬減農薬の田んぼを広げて、そこで作られたお米を「コ
ウノトリが育むお米」として大ヒットしています。香港やサンフランシスコでは1kg
1,700円で売られているという超ブランド米です。これは環境と経済の両立と豊岡では呼
んできました。

城崎温泉が有名なんですけれども、木造3階建ての旅館街を守ってですね、大きなホテ
ルは端っこにしか作ってはいけないことにして、街歩き、要するに今でいうインスタ映え
ですね。これが大ヒットしまして、まあ、2月、3月辺りはですね。関西の女子大生の卒
業旅行のメッカになっています。インバウンドも5年で40倍に増えました。コロナ以前
はですね。この一番端っこに合った大会議館、コベンションセンターをアートセンターに
作り替えて、世界中からアーティストを呼びこむ施設にしました。25人のアーティストが
いっぺんに宿泊し、作品を作る事ができます。ここはですね、短期的な成果は問わないん
ですが、まあ何かアウトリーチとか言われるワークショップなどをしていただく。こうい
ったことが普通の風景になっています。

数年前、森山未来君。オリンピックのオープニングで踊っていましたが、彼に1か月ぐ
らい滞在して、城崎・豊岡の子どもたちと一緒に作品を作るという。特殊な例ではなくて
こういうことが毎月のように行われているという世界トップクラスのアーティストが集ま
ってきます。この町で世界と出会うという。要するに東京や大阪に行かなくても、この町

で世界評点のアートと子どもたちが触れることができる。もちろん大人たちもです。

教育政策も大きく変わってきました。市内の36のすべての小中学校で演劇教育、演劇的手法を使ったコミュニケーション教育を実施しております。但馬地域のすべての高校でも演劇を導入しています。これはですね。大学入試改革に備えた教育を豊岡では公教育ですべて行っていますよということです。実際に豊岡には豊岡高校という県北でもっとも優秀な進学校があるんですけども、これまでは、国公立でAOや推薦入試を使うのは一桁だったんですけど、昨年一挙に50名以上がこれを利用して、20数名がこれを利用して国公立を受かった。要するにコミュニケーションを高めることによって、今までの偏差値の尺度ではないところで大学に入れる時代になってきているんですね。こういうことを公教育で行っています。

安心して移住してきてください。これも地方創生の一環として行っています。最終的なものとして、4月にですね。芸術文化観光専門職大学が開学しました。学年は80人、全学320人ですけども。真庭市でも想像していただければ分かると思うんですけど、子どもの生まれる数、豊岡で600人を切っています年間で。そのうちの7割がいったん外に出るわけです。19歳人口が150人程度だったわけです。そこへ毎年80人の若い人たちが入ってくる。日本初めて演劇とダンスの実技が本格的な学べる公立大学がキャッチフレーズになっています。そして観光を学ぶことができる。こんなところに少子化の時代に大学を作って来るのかと言われましたが、推薦入学が4.9倍。AOが11倍。平均で7.8倍という圧倒的な志願倍率になりました。そして北海道から沖縄まで、出願のなかった県が3県しかないというぐらいに全国から学生が来ております。そして85%が第一志望で、オンラインのまさに待たれていた大学として開学をいたしました。この学生たちが、どのくらい但馬豊岡に残ってくれるかが、豊岡の未来を決するともいいぐらいだと思っています。ただ、もちろん80人定員ですけども、この倍率を維持してできれば、今後ですね定員を増やしていきたいとも考えております。

豊岡の文化推進も、子ども、1・2年生は全員、演劇をします。6年生は狂言。4年生がクラシック音楽。これは全部公教育の中で、生で体験します。そこで興味を持った子供たちを、先ほどの城崎国際博物館で、無料で演劇を見たりとかダンスを見たりとかして、さらに興味を持った子たちは、駅前の市民プラザというところで、プロの演出家と一緒に一週間ぐらいかけてお芝居絵を作る。舞台製作というのは、すそ野を広げてさらにやりたい子たちはステップアップしていく。このピラミッド型にしていくことが大事なんです。まず豊岡はこれができてきたかなと思っています。豊岡にいても最先端の文化に触れることができますよと。

スポーツはもともとスキー場があったりして、マリンスポーツがあったりしますし、食文化は非常に豊かなので、私、東京から2年前に移住してきましたが、私自身はですね、何不自由なくこの豊岡で暮らしております。もう一つはですね。これも多少真庭でも参考になるかと思うんですけど、多くの市町村合併をした自治体が、施設が余ってしまっているわけですね。そこで豊岡市の場合には、機能分化ということをしました。例えば、演

劇・ダンスのような劇場というのは鑑賞するものと、交流事業、ワークショップとか共有教育。そして作るという3つの機能・劇場を持っていないといけないわけですけど、これをそれぞれの劇場で分担しようということですね。たまたま歌舞伎小屋というのもあったもんですから、様々な個性的な劇場を使って機能分化することによって税金の使い道をはっきりしていこう。城崎に城崎国際アートセンターがあって、豊岡に市民会館と市民プラザがあって、出石にやっかんという歌舞伎小屋があって、2番目に人口の多い平賀に何もなかったの、ここに劇場をつくらうということで、もともと町役場だったところをうちの劇団が買い取りまして、民間の劇場をつくりました。140人ほど入る小劇場です。ここは、うちの劇団のフランチャイズになっています。劇場はそろっているの、国際芸術祭をやるということで、今年残念ながら中止になってしまったんですが、豊岡国際演劇祭。去年ですね。コロナ禍で客席を半分にしたんですが、それでも延べ5千人来ました。今年は1万人を予定して演劇祭を実行する予定だったんですが残念ながら中止になってしまいました。また来年はやりたいと思っています。

ちょっと駆け足でご紹介してきたんですが、豊岡の話は今年1月にも出しましたので、せつかなのでもうちょっとほかの自治体の事例を紹介したいと思います。これは青森県八戸市です。ここは人口23万人の非常に大きな都市ですけども、ここも中心市街地の活性化に悩んでいたわけです。この赤が日曜日で、緑が月曜日で、最後は人出の数が同じになってしまっているのが分かります。要するに、週末に街に誰も出てこなくなってしまうんですね。郊外のショッピングセンターへ行くようになってしまった。

そこで活性化の切り札として、「はっち」という施設を作りました。この「はっち」の面白いところは、「はっち広場」という広場があるんですけど、普段は高校生が自習とかしていたりするたまり場になっているんですけど、ここが一番大きい場所で、あとこういった生涯学習の為のワークショップスペースをたくさん用意してあります。子育て支援の施設なんかもあります。年間で、この「はっち」だけで、400のワークショップが行われています。400の生涯学習活動が行われています。200は市主催。200はNPOがやっているものを市が後押ししたものです。その結果としてですね。人口23万人の街なんですが、開館から1年目で、88万8,888人の入場者を記録したと。実際にですね、表通り、開館の表通りの人出は倍増しました。それで中心市街地でも、1年間で30%増です。そして驚くべきことにですね、1年間で23の空き店舗が埋まりました。3年間で50の空き店舗が埋まりました。これは生涯学習施設がですね、ある文化施設が街づくりに貢献した最も成功した例だと言われています。要するにですね、商店街というのはもともとポテンシャルのあった場所なんですよ。人々が集まってきていた場所なんです。ただこれを郊外型ショッピングセンターと対抗するためにですね、福引とか値引き構想とか、経済の論理で戦っても人はなかなか戻ってこない。それは大資本の方が勝つに決まっています。

しかし、もともと人が集まってきていた場所なので、何かの、これは誘客と言いますけれど、何か誘う機会があれば、人々は来るわけですよ。大体成功している文化施設とい

うのは、こういう複合的な施設です。高松市なんかも天満屋さんが撤退して、そこの跡を買い取って、図書館の分室とデイケアサービスと子育て支援とそれから市役所の出張所ですね、土日でも住民票が取れる。それからワークショップスペースを作って、そうするとですね家族でやってきて、認知症のおばあちゃんをデイケアに預けて、おじいちゃんは図書館で新聞を読んで、お父さんと子どもがワークショップを受けている間にお母さんは、ちょっと買い物をしてくる。今時ですから、冷凍機付きのコインロッカーにおいて置いたら、買物をしたものを置いておいて、子どもたちはお父さんと買い物に行ってくるよと。要するに、家族で1日過ごせるような居場所ってというのがこれから大事になってくる。そういう複合施設が、非常に成功しています。それは、もちろん器も大事なんですけれど、「はっち」で見てくるように、中身ですね。しかも、今の若い方たちを引きつけるようなワークショップとかですね。センスのいい催しですね。例えば「はっち」はですね、いわゆる生涯学習施設なんですけれども、とんがったこともやっているんですね。周りが繁華街、居酒屋さんとかスナックが多い場所なんです。そこで年に1回、「酔っ払いに愛を」という企画があって、これはスナックとかでお酒を飲んでいるとですね。白塗りのダンサーが入ってきて15分ほど踊って去っていくという、ただそれだけなんです。ただ、これはいつ入ってくるか分からないので、ずっと飲んでなきゃいけない。この2日間、スナックの飲み屋の売り上げが上がる。そういうちょっとユニークなものとかね。いろんな階層の人をひきつけるものとかですね。そういうものがこれから重要になってくるんじゃないかなと。

例えば、城崎国際アートセンターもいろいろな目標をもって造られました。短期的にはもちろん集客です。そして中期的には教育や人材育成です。最終的には、城崎のブランド自体を上げていこうということなんです。こういった施設の役割とか、生涯教育の役割とかは、重層的になっているということなんですよね。一つのこと一つ目標を立てるということは、大事なんですけれども、それだけではなくて、教育に役に立ったり、あるいは地域の交流に役に立ったり、そして、最終的には、ブランドイメージを高めて、Uターン者・Jターン者を増やして、人口減少に少しでも歯止めをかける。いろいろな役割がこれからの生涯学習には期待されているのではないかということです。

非常に駆け足でしたけれども、今日の話と関係なくても、ご質問をお受けしたいと思いますので、何かあればご質問ください。ありがとうございました。

(事務局)

先生大変ありがとうございました。委員の皆さんにはせっかくの機会ですので、先生に仰っていただいたように、演題と関係のないことでも、なんでも結構ですので、ぜひ先生の方に質問があれば、お二人ほどお受けしたいと思いますので、宜しくお願いします。

(委員)

専門職大学が各地に作られて、特色があるのが出ているんですが、その部分で出資というか、どういう形の趣旨で、どういう条例でつくったか考えていかないといけないことですよ。

(平田)

本学は県立大学ですので、100%県の予算です。豊岡市は土地を7個ほどですね。もともと空き地だったところを民間から買い取って、それを無償で県に貸し出しているという状態になっています。それ以外に市の負担は、まあ、年間でちょっと補助をいただいていますけれど、2千万円程度かと思えますけれども、それ以外の負担はありません。県が建てていただきました。これは真庭も不可能ではないと思っています。

但馬の場合には但馬の16万人、このくらいの地域に4年制大学が一つもなかったので、悲願だったわけです。専門職大学というスペックだったら、誘致が可能だということから、豊岡前市長と兵庫県前知事が動いてくださって、たった正味3年でできました。

今専門職大学が各地にできているんですが、実際にはですね、少子化なので、作ればいいというわけではなくて、これは名前を出すと恐縮ですけど、お隣の香川県ですね、高松市に瀬戸内観光専門職大学というのができました。民間が作った専門職大学ですが、うちと同じ学年80人定員ですけども、入学者が16名です。入学者ですよ。なので大学をつくればいいというものではなくて、それから、18歳の高校生にとって観光はまだ魅力的な職業にはなっていないんですね。うちはアートと結びつけたということで、多くの若者を高校生の気持ちをひきつけたのではないかと思っています。何を作るかということが非常に重要になるかなと思っています。

(委員)

ありがとうございます。もう一件だけ追加をさせてください。隣町の新見に、何十年か前に短期大学ができて、幼児教育・介護・看護。これよく30年前40年前に、地元の自治体はよく決断をされたなと思うんです。今世の中に必要とされているものは、地元で育てると、芸術とかアートとか文化とか、生き死にに求められない、明日の暮らしには困らないものですが、それをされる努力というものはありましたか。

(平田)

具体的な筋道でいいますと、先ほどの城崎国際アートセンターが県の払い下げ施設なんですね。この件の払い下げ施設を文化でうまく使うというのは、お題目ではよく聞くことですが、あれほど国際的に成功した施設も珍しくて、それをそもそも知事が非常に高く評価してくださっていて、それが伏線になっていて、そこで首長が請願をして大学誘致につながったと。アートと観光で突き抜けたものをやりましょうということで、兵庫県前知事も最後の任期だったということをご自身も自覚なさっていて、やっぱり最後に記念碑的な

ものを創りたかったところもあるから、いろんなタイミングが重なったことがあるかなと思います。もう一つ今のご質問に関連して申し上げますと、私よく説明してきたのは、明治期にはですね。国家の必要に応じて、帝国大学というのはたくさんできました。旧制中学・高校から、戦後は岡山大学になる国立大学に昇格していったと。それから戦後もう一つは、地域のニーズに応じて、公立大学がどんどん生まれてきました。これは例えば看護が足りなければ看護学部。福祉が足りなければ福祉学部。今はもう情報系ですかね。やっぱり情報の学部が非常に新設では増えています。それはとても大事で、観光業は、豊岡でも主産業ですから、観光人材を育成することで作ったわけですが、しかし観光だけでは人は来ないわけです。地域にいくらニーズがあるからと言って、実際に学生が来てくれないければ、絵に描いた餅になってしまうわけです。本学は、地域のニーズに応える学生を育成するけれども、それ以上に地域のニーズを発見できる学生を育成すると。今の地域の要望に応えた人材を輩出するだけでは、もはや教育機関としてはダメで、そうではなくて、明日のニーズをくみ取れる人材育成するんだと。明日の可能性や明日の価値を生み出させる人材を育成するんだという風に申し上げておきます。これが理解を得られたということと、そして、そのコンセプトで観光とアートを結び付けたところが、若い18歳の受験生の心に響いたのではないかと考えています。

(平田)

夢みたいなことを言ってたばかりではなくて、ちゃんと目算もあって、全国に演劇部のある高校がまだ2千あるんです。特に進学校の演劇部の生徒さんたちの受け皿がまだないんですね。足りないんです。特に関西では。東京ですと、早稲田とか明治の演劇専攻に行くんですけども、関関同立が全然演劇コースがないもんですから、座学でも演劇を学ぼうとすると、大阪大学文学部演劇専修とかになってしまうんですね。その真ん中のところがなかったんで、その空白地帯ということはわかっていたので、そのところを狙って、マーケティングリサーチがしっかりあったということもあります。

(事務局)

リモートで参加している委員の皆様やもしよかったら高校生の皆さんせっかくの機会なので、もうあと一方おられたら、ご質問をお受けしたいと思うんですが、どうでしょうか。

(委員)

すみません。先ほど複合施設のお話ができましたけれども、例えば、八戸と同じ青森県内でも、青森の市街地に確かそういう複合施設があったと思うんですが、それはさっぱりダメで、箱モノは大きな箱モノができていて、そういう公共機関もあり、図書館も多分あったと思うんですけど、これが全然だめで、本当に閉まっているフロアが多かったり、岡山でいうと東の端の備前市に天満屋があって、店を構えていたんですが、天満屋が撤退して、そのあと撤退に乗り遅れたテナントと備前市が複合施設として利用し始めたけれども、

全然だめで、その成功する複合施設とそうでない複合施設との違いってというのはどこにあるんでしょうか。

(平田)

一言で申し上げるとセンスということになってしまいうんですが、青森の施設も実は使ったことがあります。あそこはスタジオもあるんですよ。ところが、あそこは複合施設の仕方が、あまり悪口を言うのもあれですが、めちゃくちゃですね。下のところに海鮮市場があるんですよ。でスタジオにですね。その魚のにおいが上がってきたりして、まったく何というか、おしゃれな場所になっていないんですよ。要するに若い人たちが、デートに使えたりとか。若い夫婦が、ちょっとおしゃれな場所として、子どもをワークショップに預けて、お父さんお母さんが久しぶりに二人きりでちょっとカフェでスイーツを食べながら話してみようかみたいなところを作っていないといけない。それも本当にセンスにかかっているわけですね。

ちょっと具体的なお話をしますと、八戸の場合はですね。市長が非常にそういった文化に関心が高くて、「はっち」というのを作るときに、通常 23 万人の市ですので、当然文化課とか文化振興課とか生涯学習課に任せるわけですけども、作るぞという 4 年前からぐらいですね。市役所 2 千人ぐらいの職員の中で、やりたいやつ手を上げろと言って、垣根を取っ払って、本当に 7 人の侍みたいなチームを作ったんですよ。そこに初代の館長、女性の非常に優秀な市役所職員の方がいらっしゃって、部長クラスの彼女をリーダーに、非常に先鋭的なチームを作ってですね。私もたまたま八戸東高校というところに、毎年教えに行っていたものですから、私とか教えに行くんですけど。ほぼ授業が終わると、ほとんど拉致されてですね。市役所に連れていかれて、この計画を見せられて、これはどのようにすればいいですかとか、こういうことをやりたいんですがどうすればいいですかと、人の使い方が非常にうまかったと思うんですね。23 万人の市で、2 千人ぐらい市役所職員がいるとですね。中にはですね。実は毎月東京に演劇見に行っていましたとか、映画が命ですか、言うやつがいるわけですよ。隠れているわけですよ。市役所職員の中に。そういう若手職員にとっては、水を得た魚のように、市の予算で東京とかに視察に行けるわけですから。彼らが本当に頑張っています。自分たちだって年間 200 のワークショップを企画して運営しているんですよ。でも楽しくてしょうがないんですよ。彼らは。そういう若手職員のやる気を引き出すために、その初代館長のリーダーシップとかですね、それから市長のリーダーシップとか、そういうものがあってその施設がうまくいったということがあると思います。ただ先ほど言ったように、人の使い方がうまかったということもありますね。当然地方なので全部のことは賄えないので、ある部分については、仙台から優秀なプロデューサーを呼んだり、東京から有能なプロデューサーを呼んだり、部分的に委託をして、丸投げではなくてですね。そこら辺の人の使い方がうまかったなという風に。私が八戸と 20 年来の付き合いがあって、それを見ていく過程で、そういうことを感じました。

(事務局)

先生ありがとうございました。時間いっぱいいろいろと教えていただきありがとうございます。非常に残念なのですが、時間が参りましたので、ここでお別れすることになるんですが、今日のお話にありましたように、文化芸術、食などを含めまして、いかにセンスを磨いていくか、そういった人材を育てていったり、いろんな方々が、こちらに目を向けていただけるような、おしゃれな街にしていきたいなと言う気持ちを新たにしております。

それでは講師の平田先生の方に感謝を込めまして、こちらにおります委員さん等で拍手を持ってお礼に代えたいと思います。先生大変ありがとうございました。